JAPANESE A2 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A2 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A2 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Tuesday 3 May 2005 (morning)
Mardi 3 mai 2005 (matin)
Martes 3 de mayo de 2005 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A consists of two passages for comparative commentary.
- Section B consists of two passages for comparative commentary.
- Choose either Section A or Section B. Write one comparative commentary.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- La section A comporte deux passages à commenter.
- La section B comporte deux passages à commenter.
- Choisissez soit la section A, soit la section B. Écrivez un commentaire comparatif.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- En la Sección A hay dos fragmentos para comentar.
- En la Sección B hay dos fragmentos para comentar.
- Elija la Sección A o la Sección B. Escriba un comentario comparativo.

問題Aか問題Bのどちらかを選び、答えなさい。

問題　A

次の二つの文章の共通点・相違点、主題について論じなさい。またその際、筆者が自分の考えを読者に伝えるために用いている文の構成・語調・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考えに入れなさい。

テキスト　1(a)　　カエルの季節　　長谷川真理子

小さい時から、オタマジャクシはとても可愛いと思っていたが、成体(せいたい)のカエルは、ぬめぬめしたからだの感じが気持ち悪くて、とても好きにはなれなかった。しかし、千葉県の山の中でニホンザルの調査をしていた時、小さなアマガエルを初めて手にとって、その美しさと可愛らしさに感激した。2,3 センチほどの鮮やかな緑色のからだ。半透明の美しい手足。両手にくるんでそっとのぞくと、大きな金色の眼でウィンクした。その瞬間、私はカエルが大好きになったのである。

現在、世界中にカエルは3,500 種ほどいるが、子供の育て方で、カエル類ほど多様性に富んだ動物もいないのではないだろうか？　日本産のカエルの中にはそれほど変わった繁殖形式を持つものはいないのだが、世界を見渡すと実に多用である。たとえば、哺乳類(ほにゅうるい)は、すべての種で、雌(めす)による子供の授乳が見られ、90パーセントの種は雌だけで子育てをする。そして、 1回に産む子の数は、1匹からせいぜい十数匹の範囲である。つまり、哺乳類の子育てにそれほど多様性はない。

ところが、カエルの仲間は、子育てを全くしないものから、かいがいしく子育てするものまで千差万別であり、産卵数にはたったの 2個しか産まないものから 2万個までの幅がある。世話を多くする種は産卵数が少なく、産みっぱなしの種は、産卵数が多い。しかも、母親だけが世話するものもあれば、父親だけが世話するものもあり、両親がそろって世話するものもある。そして、その世話の内容も驚くほど多様だ。（中略）

カエル類は今、全世界的に減少し、絶滅に瀕(ひん)しているものが多数ある。オタマジャクシは水性で、成体は陸と水の両方を利用することから、農薬や除草剤による汚染の影響にはことさら敏感なようだ。温暖化と熱帯林の減少も、彼らの絶滅を早めている。日本は、水田文化のためか、古来よりカエルは身近な動物として愛されてきた。私と同様、子どもの時にカエルをいじめて、逆にいのちの大切さを覚えた人もたくさんいるにちがいない。しかし、最近は、日本でもカエルはずいぶん減ってしまった。

私の家の玄関脇には、 1匹のヒキガエルが住んでいる。冬の間はあまり見ないのだが、 5月ともなると花壇の中に姿を現す。もうかれこれ10年ほどになるだろうか？　出てくるたびに、「今年も元気か？」と声をかけたくなる庭の住人である。

（日本経済新聞　2003年 5月 4日、仮名遣いを一部変更）

長谷川真理子（1952--）生物学者。早大教授。専門は行動生態学。著書に『進化とは何だろう』など。

テキスト　1(b)　　農は文化と環境を育(はぐく)む　　（富山和子氏へのインタビュー）

聞き手「稲作は日本においては水利事業でもあり、「水田はダムである」が持論ですね。」

富山「急峻(きゅうしゅん)で川が短く、雨が一定の時期に集中する日本では、稲作においても水の確保が最大の課題でした。そこで我々の先祖は、山の斜面を平らにして畔(あぜ)を築き、川をせき止め、水路をつくり、何百もの田に水を張っていきました。それはたくさんの村々が利害を調整しながら、協力しなくてはできない大事業でしたから、日本人の「和(わ)を貴び何事も共同して行う」精神性は、この水田づくりで養われたともいえます。水田は雨を蓄え、その水は地下水となり、何十年、何百年もたって川の水になる。地形的に急峻な日本では放っておけばあっという間に海に流れてしまう水を大地にとどめているわけで、水田は貴重な水資源を生み出しているのです。現在でも都会に水を安定的に供給し、洪水被害を防ぐ上で、水田の果たしている役割は大きい。さらに水を確保し、水田が洪水で流されないように、中山(ちゅう)間地の農家は森に木を植え、日本の緑を営々と守ってきたのです。」

聞き手「日本の豊かな水と緑は、稲作によって育まれてきたということですね。」

富山「自然保護の先進国をヨーロッパだと思っている人が多いのですが、実は日本のほうが大先輩です。日本では飛鳥時代の七世紀にはすでに森林保全のための法律が敷(し)かれています。西欧の文明は森林を切り開くことで文化を育てましたが、日本は木を植えることで文化を育てました。知床(しれとこ)の森林も白神山地も、昔から人間が深くかかわりながら守ってきたものです。自然を守るとは、自然を野放(のばな)しにすることではありません。むしろ自然の再生サイクルに人間が参加し、その恵みを受け取ると同時に、お返しをすること。それが日本の農林業であり、それは今まさに世界がめざしている持続可能な開発のお手本です。世界のそのお手本である日本農業が守れずに、どうして地球が守れるのでしょうか。」

聞き手「しかし減反やコメの消費量の減少、後継者不足などで、日本の稲作は衰退の一途をたどっていると言われます。」

富山「今、日本の山村はすさまじい勢いで荒廃しています。水田が消え、集落が絶えれば山の守り手もいなくなります。日本人がコメづくりをやめれば、山の緑や川の水も失われるのです。日本人がコメづくりで養ってきた勤勉さ、緻密(ちみつ)さ、粘(ねば)り強さといった美徳も失われ、モノづくり文化も衰退する。自然と共生し、四季をめでる感受性、命を慈(いつく)しむ心が薄れ、精神的にも荒廃していく。すでにその傾向は現れてきています。」

（朝日新聞　2004年8 月29日、仮名遣いを一部変更）

富山和子　評論家、日本福祉大学客員教授。水問題を林業の問題にまで深め、「水田はダム」の理論を提唱。著書に『水と緑の国、日本』『川は生きている』などがある。

（注）

急峻（きゅうしゅん）	非常にけわしいこと。
畔（あぜ）	田と田の間に土を盛り上げて境(さかい)としたもの。
中山間地（ちゅうさんかんち）	山と山の間の土地。
減反（げんたん）	田畑に作物を植え付ける面積を減らすこと。

問題 B

次の二つの文章の共通点や相違点、主題について論じなさい。またその際、筆者が自分の考えを読者に伝えるために用いている文の構成・語調・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考えに入れなさい。

テキスト２（ａ）　　わたしが一番きれいだったとき　　茨木(いばらぎ)のり子

わたしが一番きれいだったとき
街々(まちまち)はがらがら崩(くず)れていって
とんでもないところから
青空なんかが見えたりした

わたしが一番きれいだったとき
まわりの人達が沢山死んだ
工場で　海で　名もない島で
わたしはおしゃれのきっかけを落(おと)してしまった

わたしが一番きれいだったとき
だれもやさしい贈物を捧げてはくれなかった
男たちは挙手(きょしゅ)の礼しか知らなくて
きれいな眼差(まなざし)だけを残し皆発(た)っていった

わたしが一番きれいだったとき
わたしの頭はからっぽで
わたしの心はかたくなで
手足ばかりが栗色に光った

わたしが一番きれいだったとき
わたしの国は戦争で負けた
そんな馬鹿なことってあるものか
ブラウスの腕をまくり卑屈(ひくつ)な町をのし歩いた

わたしが一番きれいだったとき
ラジオからはジャズが溢(あふ)れた
禁煙を破ったときのようにくらくらしながら
わたしは異国の甘い音楽をむさぼった

わたしが一番きれいだったとき
わたしはとてもふしあわせ
わたしはとてもとんちんかん
わたしはめっぽうさびしかった

だから決めた　できれば長生きすることに
年とってから凄(すご)く美しい絵を描いた
フランスのルオー爺さんのように　　ね

（茨木(いばらぎ)のり子「わたしが一番きれいだったとき」『見えない配達夫』、1958年）
（注）茨木のり子（1926- ）詩人。『対話』などがある。
　　ルオー　フランスの画家、ジョルジュ・ルオー（1871-1958 ）のこと。

テキスト　2(b)

（1918年、当時の日本政府が欧米諸国と共にロシア革命に干渉するに際して、日本の兵士たちは、シベリアにやって来た。彼らはシベリア出兵の理由を、何も知らされてはいない。ある日、大隊長のふとした気まぐれから、雪の壙野への行軍を命じられた松木と武石の中隊は、道を失って倒れ、厳寒の中に取り残される。その上を雪はなおも降り続き、やがて春が来る。その壙野を、別の中隊が通って行く。）

河があった。そこには、まだ氷が張っていた。牛が、ほがほがその上を歩いていた。

右側には、はてしない壙野があった。

枯木が立っていた。解けかけた雪があった。黒い烏の群が、空中に渦巻いていた。陰鬱に唖々と鳴き交すその声は、丘の兵舎にまで、やかましく聞えてきた。それは、地平線の隅々からすべての烏が集まって来たかと思われる程、無数に群がり、夕立雲のように空を蔽わぬばかりだった。

烏はやがて、空から地平をめがけて、騒々しくとびおりて行った。そして、雪の中を執念くかきさがしていた。

その群は、昨日も集っていた。

そして、今日もいる。

三日たった。しかし、烏は、数と、騒々しさと、陰鬱さとを増して来るばかりだった。ある日、村の警衛に出ていた兵士は、ロシアの百姓が、銃のさきに背嚢を引っかけて、肩にかついで帰って来るのに出会した。銃も背嚢も日本のものだ。

「おい、待て！それゃ、どっから、かっぱらって来たんだ？」

「あっちだよ。」髯もじゃの百姓は、大きな手をあげて、烏が群がっている曠野を指さした。

「あっちに落ちとったんだ。」

「うそ言え！」

「あっちだ。あっちの雪の中に沢山落ちとるんだ。……兵タイも沢山死んどるだ。」

「うそ言え！」兵士は、百姓の頬をぴしゃりとやった。「ちょっと来い。中隊まで来い！」

日本の兵士が雪に埋れていることが明らかになった。背嚢の中についていた記号は、それが、松木と武石の中隊のものであることを物語った。

翌日中隊は、早朝から、烏が渦巻いている空の下へ出かけて行った。烏は、あさましくも、雪の上に群がって、貪欲な嘴で、そこをかきさがしつついていた。

兵士達が行くと、烏は、かあかあ鳴き叫び、雲のように空へまい上った。

そこには、半ば貪り啄かれた兵士達の屍が散り散りに横たわっていた。顔面はさんざんに傷われて見るかげもなくなっていた。

雪は半ば解けかけていた。水が靴にしみ通ってきた。

やかましく鳴き叫びながら、空に群がっている烏は、やがて一町ほど向うの雪の上へおりて行った。兵士は、烏が雪をかきさがし、つついているのを見つけては、それを追っかけた。

烏は、また、鳴き叫びながら、空に廻い上って、二三町さきへおりた。そこにも屍があった。兵士はそれを追っかけた。

烏は、次第に遠く、一里も、二里も向うの方まで、雪の上におりながら逃げて行った。

（黒岩傳治『渦巻ける烏の群』1928年、現代仮名遣いに変更）

黒岩傳治（1898--1943）小説家。1921年にシベリアに兵士として派遣されるが、肺を侵されて帰還。

背嚢　軍人が物品を入れて背に負う四角形のカバン。